

**頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書**

**タイ民主化における司法の役割  
—司法、軍、王室—**

派遣者：外山 文子

派遣期間：2014年4月1日～6月30日、7月2日～8月1日

派遣先：コーネル大学東南アジアプログラム（米国）

キーワード：タイ民主化、司法の政治化、政治の司法化、軍、王室

**1. 研究課題について（400字程度）**

現在タイでは、司法による政治的判決を巡って、国を二分する激しい対立が生まれている。司法の判決が、なぜ一部国民から激しく批判され、その政治的偏向性を糾弾されるのか。タイ司法が「政治化」した原因は、何であるのだろうか。司法の「中立性」や「独立性」に対しては、既に疑問を呈する見解が登場している。

本研究では、憲法裁判所のみならず、政治職者の刑事裁判を担当する最高裁判所、各種独立機関（選挙委員会、国家汚職防止取締委員会等）、その他の取締機関をも含めたタイ司法全体について制度などの特徴を描き出し、「司法ネットワーク」が政治化した原因を明らかにすることにより、司法の民主化に対する影響を検証することを目的とするものである。

**2. 派遣の内容（400字程度）**

米国コーネル大学東南アジアプログラムへの最後の派遣期間である。引き続き講義に出席しつつ、何度か受入のタック先生に研究相談にお伺いした。また、5月～7月までは、集中的にタイ語文献のスキャンを行った。派遣期間の終盤となったこともあり、この後に渡航するタイや日本で入手しにくいと思われる、1960年代&1970年代のタイ語文献をひたすらスキャンした。タイ司法の政治的役割については、1970年代に鍵があると考えていたため、特にこの時代の2つの政権、サンヤー政権とターニン政権に注目し、この2つの政権について徹底的に検索を掛けて、ひたすら文献を集めた。また、1940年代の憲法起草会議の議事録を偶然に開架で発見したため、こちらも3日かけてスキャンした。憲法関係の議事録は項数が膨大であり、午前から夜9時まで作業しても数日かかるなど、根気のいる作業であった。

また、4月22 - 24日にオーストラリアのシドニーで開催された12th International Conference on Thai Studies、6月28 - 29日に東京大学で開催された日本比較政治学会において発表を行った。

**3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800字程度）**

とにかくラストスパートということで、文献収集とともに、十脈作りにも励んだ。ちょうど、5月下旬にタイでクーデタが起こったため、タック先生が緊急研究会を開催なさった。そこで、新しくタイ人の知り合いが増えた。また、知り合いの伝手で、偶然にもイサカでタイの労働運動のリーダーの方にインタビューする機会を得た。直接今回の研究テーマとは関係なかったが、今後の研究に広がりを与えてくれる良い出会いであった。その後も、図書館で声をかけられたり、また、夏の間だけ客員研究員とし

て来られたタイ人研究者の方々とも知り合いになるなど、最後に一気に知り合いが増えた。この後、もう半年ぐらいコーネル大に残りたいと感じた。



**12th International Conference on Thai Studies  
(2014年4月22 - 24日@University of Sydney)**





日本比較政治学会（2014年6月28-29日：東京大学）



コーネル大学東南アジアプログラムのメンバー

#### 4. 目的の達成度や反省点 (400字程度)

文献収集については、もう少し時間が欲しかったが、1970年代のものに関しては一応まずまず収集できた。しかし、コーネル大学の蔵書の膨大さを考えると、1940年代、1960年代、そして1990年代以降についても、多くの貴重な資料があった可能性がある。この点については、チェックしきれておらず残念である。また今後時間が出来た際に、コーネル大に調査に行きたいと考えている。

コーネル大での人脈作りという点では、国際学会発表が連続し過ぎたために少々遅れ気味であったが、最後のラストスパートである程度拡大させることができたので、この点はまずまずといったところ。コーネル大を離れてからも連絡を取り合っているのも、今度の研究において良い方向で活かしていければと考えている。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標 (400字程度)

コーネル大学への今回の派遣は終了。

次は、タイ・チュラロンコーン大学政治学部へ移動する。コーネル大学では、司法の政治的役割について歴史的側面に注目して文献収集を行ってきた。しかしタイでは、1990年代から現在までの新しい情報について収集を行いたい。加えて、タイ人研究者との交流により、試行錯誤中の研究について突破口を模索したいと考えている。

また5月のクーデタ以降、初めてのタイ渡航となるため、現在のタイ情勢について肌で色々と感じたいとも思っている。